

銀河の下の町

小川未明

青空文庫

信吉は、学校から帰ると、野菜に水をやったり、虫を駆除
 したりして、農村の繁忙期には、よく家の手助けをしたので
 すが、今年ことしは、晩霜ばんそうのために、山間さんかんの地方ちほうは、くわの葉はがま
 ったく傷いためられたというので、遠とくからこの辺へんにまで、くわの葉は
 を買かい入いれにきているのであります。米こめの不作ふさくのときは、米こめの価あたい
 が騰あがるように、くわの葉はの価あたいが騰あがつて、広ひろいくわ圃ぼたけを所有しよゆう
 している、信吉しんきちの叔父おじさんは、大おおいに喜よろこんでいました。

信吉しんきちは、うんと叔父おじさんの手助てだすけをして、お小使こづかいをもらつ

たら、自分のためではなく、妹になにかほしいものを買ってやって、喜ばせてやろうと思つていほほど、信吉は、小さい妹をかわいがつていました。

白い手ぬぐいを被つた、女たちといつしよに、彼は、くわの葉を摘みました。そして摘まれた葉は、大きなごに詰められて送られるのですが、彼はそれをリヤカーに乗せて、幾たびとなく、停車場へ運んだのであります。

口笛を吹きながら、街道を走りました。空には、小波のような白い雲が流れていました。午後になると、海の方から、風が吹きはじめます。日がだいぶん西にまわつたころ、ガラガラとつづいてゆく、荷馬車に出あいました。車の上には、派手な着物

を被きておしろいをぬった女おんなたちのほかに、犬いぬや、さるも、いつしよに乗のっていました。

「ああ、サーカスが、どこかへゆくんだな。」と、信吉しんきちは、思おもいました。

昨日きのうまで、町まちにきていて、興行こうぎようをしていたのです。それが、今日きょう、ここを引き揚あげて、また、どこかへ行って、興行こうぎようをしようとするのでした。彼かれらは、住すんでいたテントをたたんで、いつさいの道具どうぐといっしよに車くるまへ積つみ、そして、芸当げいとうに使つかっていた馬うまに引ひかせてゆくのでした。その簡単かんたんな有あり様さまは、太古たいこの移い住じゆう民族みんぞくのごとく、また風かぜに漂ただよう浮うき草ぐさにも似にて、今日きょうは、東ひがしへ、明日あすは、南みなみへと、いうふうでありました。信吉しんきちはそれを見み

ると、一種の哀愁を感じるとともに、「もつとにぎやかな町があるのだろう。いつてみたいものだな。」と、思ったのでした。村に近い、山の松林には、しきりにせみが鳴いていました。信吉は、池のほとりに立って、紫色の水草の花が、ぽっかりと水に浮いて、咲いているのをながめていました。どうしたらあれを探ることができるかな。うまく根といっしよに引き抜かれたなら、家に持って帰って、金魚の入っている水盤に植えようと空想していたのでした。

このとき、あちらの道を歩いてくる人影を見ました。よく、見ると、洋服を被た、一人の紳士でした。

「どこへゆくのだろう？」

紳士しんしは、めつたに人の通とおらない、青田あおたの中なかの細道ほそみちを歩あるいて、右みぎを見みたり、左ひだりを見みたりしながら、ときどき、立ち止たまどつては、くつの先さきで石塊いしころを転ころがしたりしていました。

「どこの人ひとだろう？ あんな人ひとはこの村むらにいないはずだが。」と、信吉しんきちは、その人ひとのすることを見みつけていました。

二

やがて、紳士しんしは、池いけのほとりに立たつていて、少年しょうねんの姿すがたを見みつけると、こちらこちらの方ほうへやつてくるようです。

「ああ、きつと旅たびの人ひとで、道みちに迷まよつたのだ。海岸かいがんの方ほうへ出でるに

は、あちらの道みちをゆけばいいのだが。」と、信吉しんきちは、思おもつていました。近ちかづいた紳士しんしは、ふいに、

「この池いけは、なんといいいますか？」と、たずねました。

「池いけですか、弁天池べんてんいけといいいます。」

「弁天池べんてんいけ……なにか、仏さまが祭まつつてあるのですか。」と、紳士しんしはききました。

「昔むかしは、あつたそうですが、いまは、なんにもありません。」と、信吉しんきちは、答こたえました。

紳士しんしは、うつとりと池いけの景色けしきをながめていましたが、

「じゆんさいがありますね、なかなか古ふるい池いけとみえる。君きみは、なにかこの池いけについて、おもしろい昔むかし話はなしを聞きいたことがあります

せんか。」と、紳士は、たずねました。信吉は、この人は、道を迷ったのでない。なにか、この池についてしらべているのだなと思ひました。

「ええ、知っています。」

彼は、子供の時分から、よくきいた、伝説を思い出したのでした。

「以前は、よくこの池に金の鶏が浮いたそうです。なんでも、お天氣のいい、静かな日にゆくと、金の鶏が、水の面に浮いているが、人の足音がすると、その鶏の姿は、たちまち水の中に消えてしまうと、お母さんが話しました。」と、信吉は、いいました。

「金の鶏きんにわとり？ やはり、そんな伝説でんせつが伝わつたっているんですね。」
と、紳士しんしは、うなずきました。

「おじさん、そんならほかにも、金の鶏きんにわとりが浮うく池いけがあるんですか。」と、信吉しんきちは、不思議ふしぎそうに、紳士しんしを見上みあげたのでした。

「ありますよ。たぶん、私わたしは、そんなうわさがあるところでないかと思おもつて、ここへ立たち寄よつてみたのです。古墳こふんのある丘おかや、畑はたけには、金の蔵くらが浮うかぶとか、金の鶏きんにわとりが浮うかぶとかいううわさが、きまつてあるものです。このあたりの地形ちけいを見みたときから私わたしは、古墳こふんのあつたところか、またどこかに発見はっけん見けんされない古墳こふんのあるところという気きがしたのです。太古たいこ民族みんぞくが、このあたりにも住すんでいたのですね。それはそうと、なにかこのあたりで、おもし

ろい土器の破片か、勾玉のようなものを拾った話をききませんか。」と、紳士はたずねました。

「僕、勾玉を拾いました。それからかけたさかかずきのようなものも拾って持っています。」

「勾玉？ さかかずきのかけたようなもの？ 君は、またどうしてそんなものに趣味を持っているのです。」と、紳士は、驚いたようです。

「いつか、この池のところで拾って、学校の先生に見せたら、おおむかし大昔のものだから、しまっておけとおっしゃいました。」

「ははあ、君のお家は遠いのですか。ちよつとそれを見せてくださいませんか。私はこういうものです。」と、紳士は、名刺を取

り出して、信吉に渡しました。名刺には、東京の住所と文学博士 山本誠という名が書いてありました。

「わたしは、古代民族の歴史を研究しているので、こうして、方々を歩いていきます。」といいました。

信吉は、自分の持っているものが、いつか学問のうえに役立てば、ひとりこの人のみの喜びでない、人類の幸福とと思いましたから、

「いえ、じき近いのです。僕、急いで持ってきてきますから。」といつて、走り出しました。

博士は、信吉の走つていった道を、急がずに村の方へと歩いてゆきました。そして、かきの木の下に立って、待っていると、信吉は、小さな紙箱を抱えてもどつてきました。

「これです。」

こういうと、博士は、その一つ、一つを手に取り上げてながめていましたが、

「これは、私のまだ見たことのない、珍しいものです。」と、感謝していました。

このとき、信吉は、

「ご入用なら、あげます。」といいました。

博士はくしの目めは、たちまち、感謝かんしゃにかがやきました。

「それなら、大学だいがくの研究室けんきゆうしつへ寄付きふしていただきましょう。ひじょうに、有益ゆうえきな研究資料けんきゆうしりようとなるのです。私わたしが、多年探たねんさがしていたものが手てに入はいって、うれしいのです。」

そして、博士はくしは、なにかお礼れいをしたいといいました。

信吉しんきちは、けっして、お礼れいなどのことを考かんがえていませんでした。

「いいえ、お礼れいなどいりません。」と、きつぱりと答こたえました。

「いや、そうでない。私わたしの志こころざしとしてです。なにか君きみにほしいものがあつたら、いってください。東とうきよう京きやうへ帰かえつたら、送おくりますか

ら。」と、博士はくしは、微笑ほほえみながら、いったのであります。

「じゃ、人形にんぎようを送おくってください。」と、信吉しんきちはいいました。

「人形？ 人形とはおもしろい。どんな人形がいい

かな。」

博士は、眼鏡の中の目を細くしながら、

「君には、埴輪がいいだろう。東京へ帰ったら、一ついい模

型をさがしてあげましょう。」といいました。

信吉は、埴輪ときいて、いつか雑誌に載っていた、白い馬に

乗った紅い人形を思い出しました。それは、思ってもなつか

しい、胸のおどるものでした。しかし、彼のいったのは自分のた

めではなかつたのです。

「いいえ、妹にやるお人形です。」と、答えました。

「ははあ、君ではないんだね、妹さんにか……じゃ、どんな、人

んぎよう
形がいろいろかな。」と、博士は、頭をかしげて考えまし
た。

「どんな人形でもいいのです。僕の妹は、病身で、家に
ばかりいて、なんの楽しみもありませんから、人形を送つて
いただいたら、たいへんに喜ぶだろうと思つたのです。」
「じゃ、東京へ帰つたら、きつときれいな人形を送りま
す。君はなかなか感心な子だ。こんど東京へ出たら、かな
らず寄つてくれたまえ。そして、またなにか見つけたら、知らせ
てくれたまえ。」と、博士は、信吉に、堅い握手をしました。

四

家に帰ると、妹のみつ子は一人で千代紙を出して遊んでいました。

「兄さん、どこへいつてきたの？」

「いま、僕、学者にあつてきたのだよ。」と、信吉は得意になつて、

「僕の拾つた勾玉や、土器が、学問のうえに役立つというんだよ。」

「まあ……。」

「そして、みつちゃん、その博士が、お礼にきれいなお人形を送つてくださる約束をしたんだよ。みつちゃん、楽しみにし

て、待つておいで。」と、信吉しんきちはいいました。

「ほんとう？ 私わたし、うれしいわ。」

「みつちゃんは、どんなお人にんぎょう形がが好き？」

「そうね。」と、弱々よわよわしそうなみつ子は、考かんがえていましたが、

「あの、サーカスに、きれいなお姉さんねえがいたでしょう。あたし、

あんなきれいなお人にんぎょう形がが好きよ。」と、答こたえました。

信吉しんきちは、あの人たちひとも、もうこの町まちを去さってしまつたと思おもい

ました。夜よるになると、裏うらの野菜園やさいばたけで、うまおいの鳴なく声こえがきこ

えました。兄きょうだい妹いは、縁側えんがわに出でて、音おともなくぬか星ほしの光ひかつて

いる、やがて初しよしゆう秋あきに近ちかづいた夜よるの空そらを見みていましたが、

「サーカスは、どこへいったでしょうね。」と、みつ子こは、いい

ました。

「あちらの、遠い町へ行って、また、ああした芸当を、みんなにして見せているのだらう。」と、信吉は、答えました。

その方角には、淡く白い銀河が流れて、円く地平へ没していただきます。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「銀河《ぎんが》の下《した》の町《まち》」
となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀河の下の町

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>